

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 7 月 5 日現在

機関番号：45102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2020

課題番号：16K17449

研究課題名（和文）芸術教育の成果の捉え難さに関する研究：音楽の教授 学習過程の構造と特質に着目して

研究課題名（英文）A Study on the Difficulty of Grasping Learning Outcomes in Art Education :
Focusing on the Structure and Characteristics of Teaching-Learning Process of
Music

研究代表者

前田 舞子 (Maeda, Maiko)

鳥取短期大学・その他部局等・助教

研究者番号：60758126

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、芸術教育の成果の捉え難さを明らかにするために、芸術教育の評価の前提に着目した。芸術教育の評価においては、子どもたちの「表現」の捉え方が重要である。「表現」を適切に理解するためには、子どもの内面世界に接近し、人間形成という広い枠組みの中で考察する必要がある。根拠のない推測ではなく、実際に現れている「表現」から、「思いや意図」を導き出すことができるような工夫が、教師には求められる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、芸術教育の評価体系や評価基準を再検討するための基礎として、芸術教育における成果の捉え方を根本的に問い直すことを試みた。教育現場においては、社会的な要求に対応すべく、評価の方法論に注目が集まりがちであり、その方法論の正当性や妥当性、あるいはその前提に目が向けられることは少ないからである。また、従来それぞれの領域にて論じられてきた教育学と芸術教育の知見を統合した成果は、芸術教科のみならず、学校教育全体の評価体系に繋がる視点であり、教える「学ぶ」という旧来の教育そのものの見直しを迫るものである。

研究成果の概要（英文）：In this study, I focused on the premise of evaluation of art education in order to clarify the difficulty of grasping Learning Outcomes of art education. In the evaluation of art education, it is important to understand children's "expression". In order to properly understand "expression", it is necessary to approach the inner world of the child and consider it within the broad framework of human formation. Teachers are required to devise ways to draw out "thoughts and intentions" from the "expressions" that actually appear, rather than unfounded guesses.

研究分野：芸術教育、教育学

キーワード：芸術教育 美的経験 教育評価 学習成果 表現

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) エビデンス重視の傾向

2000 年前後に起こった学力低下論争により、ゆとり教育の是非が問われて久しい。「学力」重視の傾向が強くなればなるほど、芸術教科が軽視されてゆく。近年の学力論を規定しているのは、OECD の PISA 調査で提起された「リテラシー」という考え方であろう。この「リテラシー」は、言語や数理などの記号を問題解決のために適切に使いこなす能力であり、これが二重の短絡を招いているという。すなわち、教育が視野に収めるべき人間の幅や厚みが「リテラシー」に切り詰められ、学習経験というプロセスが外部に放置されてしまうこと。また、アウトプットによる評価を可能にする「エビデンス」重視の傾向により、学校外部への(数値化された)「説明責任」が求められ、本来教育にとって重要な子どもたちへの「応答責任」が手薄になっていることである。

(2) 音楽教育の成果を測ることの困難性

音楽教育による成果をどのように捉えるのか、あるいは何をもちて音楽科の「学力」とするのか、を問うことは、教育者にとって必須事項である。しかし、確かな知識や演奏技術を習得することよりも、歌ったり演奏したりする活動そのものに学習の意義が見出されてきた音楽科にとって、「学力」を規定することは容易ではないし、そもそも規定することへ違和感を覚える者も多い。もっとも、そのような「学力」を測定するための実践的研究はすでに始まっている。それらの研究を大別すると、児童・生徒に獲得させるべき音楽的知識や技能とはいかなるものか、あるいはそれらをどのような手段や方法によって獲得させることができるか、という具体的な評価体系の確立に向けた議論、測定可能な成果と測定不可能な成果とを分類し、測定不可能な成果に音楽教育の本質をみる議論、がある。

以上を踏まえると、エビデンス重視の流れに迎合すると、測定可能な成果に気をとられ、音楽教育の本質を見失う危険性があるが、その一方で、音楽科が育むべき情操や感性などを、主観的で測定不可能なものとして放置することも、教育者にとって許されない、という課題が浮かび上がる。

上記(2)で示した、測定が難しい成果とは、音楽科が育むべき情操や感性、音楽を楽しむ心情などが挙げられよう。このような「美的経験」に関する議論は、日本よりもヨーロッパ(特にドイツ)において一定の蓄積がある。人間形成における美的な次元を主題とするこの概念は、日本においては、教育学あるいは教育哲学の領域で研究がさかんである。それらの研究は、音楽教育と接近する内容であるにも拘らず、具体的な音楽教育については触れられず、教育哲学研究の知見と音楽教育研究の知見は乖離したままである。

そこで、音楽教育研究(実践的なものを含む)と教育哲学研究(理論研究)とを高いレベルで統合し、それぞれを往還させるような研究が必要だと考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、芸術教育の成果の捉え難さ(なぜ捉え難いのか、どのように捉え難いのか)を明らかにすることである。評価指標の明確化や教育成果の可視化が求められている現在、本来測定することが前提とされていない芸術教育の成果観(主観的な感情やパフォーマンスなどを重視すること)と、いかに折り合いをつけるべきかが問われている。その要求に応えるための評価体系を確立することは喫緊の課題であるが、その前段階として、まずは音楽の教授 学習過程の構造を深く理解し、その特質を踏まえた議論を重ねる必要があるだろう。そのことが、芸術教育の評価指標や評価方法の構築へ繋がると考えられる。

3. 研究の方法

本研究は、音楽の教授 学習過程の構造と特質に迫ることによって、芸術教育の成果の捉え難さを明らかにするという課題のもと、(1)音楽教育研究による知見、(2)教育哲学研究による知見、を互いに関連づけながら進められる。研究方法は、主に文献研究による。

4. 研究成果

(1) 幼児期の子どもの芸術活動 レッジョ・エミリアの保育実践における芸術活動から

芸術教育の成果観の見直し

芸術教育の成果観には、人間の内面的な側面における変化や経験が含まれており、それ自体が学習=成果だといえる。例えば「聴くこと」という活動には、文化的シンボルの習得と読解という意味がある一方で、「美的経験」という人間の内的な出来事が結びついている。楽曲から音へと解体し音を聴く経験が、自分の創造した想像世界の時間の始まりへの変奏を生み出すのである。レッジョ・エミリアをはじめ保育における芸術活動では、子どもの内面的な出来事が詳らかに描き出され、子どもの経験それ自体が学習=成果とみなされている。

教授 学習活動と学習成果との関連

芸術の学習とは必ずしも教授がなければ成り立たないものではない。そのことを、教える側が認識するだけでなく学ぶ側も認識する必要があると考えられる。レッジョ・エミリアにおける芸

術活動から示唆されるのは、教師から教えられるのが当然だという認識や態度が、子どもの学習を妨げることに繋がりを、ということである。また、学習者のある活動が「学習」であるのか否か、また、「学習」とみなすのか否かについては、教師の文脈や状況に依存した判断に委ねられる。

以上のように、芸術教育特有の成果観を整理しつつ、教授 学習過程と学習成果の関連について、その歴史性や限界性という視点から慎重に議論を進める必要があると考えられる。ただし、幼児教育における学習・評価と、小学校以上における教科教育における学習・評価とは根本的に異なる。それらを意識し、芸術教育と幼児教育（保育）それぞれの領域に携わる方々と議論を重ねながら研究を推進する必要がある。

（２）音楽教育の成果観の特徴

パフォーマンス評価の難しさ

音楽科における学習成果の捉え方と評価に着目すると、音楽科が評価しようとする「表現」という「見えにくい学力」を捉えるためのパフォーマンス評価の難しさを指摘することができる。子どもの「表現」の芽生えとその発展過程は個人的なものであり、どのように「内なるもの」に気づき、どのような表現媒体と出会うか、ということには個人差がある。そのため、それぞれの「表現」を適切に評価する必要がある。当然、それを評価する教師の資質も問われることとなる。目指される唯一の固定されたパフォーマンス像を明確にするのではなく、教師自身が多様な表現（パフォーマンス像）を想定できないと、そもそも評価をすることができないということである。

「芸術」と「芸術教育」という枠から

学校教育における「教科」として評価をすることと、「芸術（音楽）」として評価をすることとの差異を指摘することができる。MI（多重知能）理論やその他の心理学研究において明らかにされている芸術の認知発達に関する諸理論は、これまで芸術教育に多大な影響を与えてきた。ただし、学校教育の枠内での評価を考える際には、芸術としての音楽の学習成果を測ること（例えば音楽コンクール）とは区別して考えなくてはならない。芸術教育に特有の学習成果の捉え方を追求することも大切だが、一方で学校教育の枠に収まり切らない芸術的な知能を評価することに限界を認めるべきではないだろうか。

（３）子どもの「表現」を評価することの困難性

「作品」と「感情」との関係から

子どもたちの「表現」を評価するためには、「（表現された）作品」と「感情」との関係を詳らかに整理することが必要である。近代美学や芸術哲学の領域において、「感情」や「情緒」は芸術（作品）の必要部分とされてきたし、芸術における最も重要な部分とされることもある。ただし、作品と感情をめぐる議論には、「芸術作品には人間の感情が表現されている」と考える立場から、「芸術作品は人間の感情表現とは無関係である」とみる立場まで様々である。更に、これらの立場を芸術教育の枠内で検討する際には、「表現」と「鑑賞」の側面から、「作品」の捉え方についての検討が必要だろう。いずれにせよ、作品と感情との関係性をどのように想定するかによって、主体的な表現の成立基盤、そして鑑賞教育の前提をも疑う議論となる。

芸術教育における「表現」概念の検討から

芸術教育において「表現」を適切に理解するためには、子どもの内面世界に接近し、人間形成という広い枠組みの中で考察する必要がある。子どもたちの表現の「思いや意図」を理解し評価するためには、表現のために思考したり判断したりしたことを言語や記号等で外化させることが必要であるが、その一方で、言葉にできない思いがあるからこそ音楽や絵画等により表現するわけである。このように、「表現」を理解することには限界が認められるものの、子どもたちの内面世界へ接近するためのアプローチは続けられるべきである。そのためには、根拠のない推測ではなく、実際に現れている「表現」から、「思いや意図」を導き出すことができるような工夫が必要なのである。

以上のように、芸術教育の成果の捉え難さを明らかにするにあたって、「表現」が重要なキーワードとなった。子どもの「表現」の芽生えや発展に関しては、心理学研究における研究蓄積があるのと併せて、幼児教育／保育の領域においても重要な概念である。幼児教育／保育の領域では、「表現」は音楽科や美術科のような教科の枠ではなく、総合的なものとして捉えられる。「環境を通じた遊び」を評価する幼児教育／保育と、小学校以上の教科における評価には隔たりがあるし、そもそも学習の捉え方自体にも差異がある。しかしながら、音楽をはじめとする芸術教科における活動を「表現」として総合的に捉える視点が、芸術教育の学習成果を捉え難くしている既存の枠組みを振り返る１つの視点となりうるのではなかろうか。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 前田舞子	4. 巻 63
2. 論文標題 芸術教育の成果観の特徴とその捉え難さに関する研究 音楽教育における学習成果の捉え方と評価に着目して	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教育学研究紀要（CD-ROM版）	6. 最初と最後の頁 127-132
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田舞子	4. 巻 62
2. 論文標題 芸術教育の学習成果はなぜ捉え難いのか 音楽の教授 学習過程構造の前提に着目して	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 教育学研究紀要（CD-ROM版）	6. 最初と最後の頁 298-303
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田舞子	4. 巻 66
2. 論文標題 芸術教育の評価基盤に関する研究 芸術における表現概念と芸術科における表現活動の視点から	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育学研究紀要（CD-ROM版）	6. 最初と最後の頁 328-333
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 前田舞子	4. 巻 82
2. 論文標題 芸術教育において「表現」とは何か 作品と感情との関連に着目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 31-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 前田舞子
2. 発表標題 芸術教育の成果観とその特質
3. 学会等名 中国四国教育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 前田舞子
2. 発表標題 音楽の教授 学習過程の構造とその特質
3. 学会等名 中国四国教育学会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 前田舞子
2. 発表標題 芸術教育において「表現」はどのように捉えられうるか
3. 学会等名 中国四国教育学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------